寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生

89

株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員 清水 秀幸

17 都市の景観を考える

筆者は、本章の冒頭でポスト成長型のまちづくりのポイントとして「心の豊かさ」の創生がその鍵を握ることを挙げた。

それは、そこに暮らす人々がそのまちに誇りを感じ、そして言い換えれば、そのまち自体が心豊かな人生のステージを人々に享受し得る存在になり得ているか否か、ということである。

また、一方で、観光客をはじめとする外来者の視点から、そのまちが訪れるに値する魅力に満ちあふれたまちであるかも大切な要素となる。

それでは、そのようなまちを造形していくためには、どうしていったら良いのだろうか。その仮説として、筆者は「景観」を語るうえで、二つの資源を用いた手法で考えてみた。その一つは、「物質的景観の造形」であり、もう一つは、「心理的景観の造形」である。簡単にそれらを置き換えると、前者は社会資本や都市基盤の整備であり、後者は文化・芸術、そして伝統を融合したまちづくりである。

この二つは、有形・無形というとらえ方でいうと、一見別の次元との見方ととらえがちであるが、ことまちづくりでいうとまったく同体したものであり、そのまちのブランディング上は、ともに不可欠の資源といえる。

まず、物質的景観の造形について語りたい。長野市の場合、1998（平成10）年の長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、著しいスピード感をもって社会資本・都市基盤は整備されたといっても過言ではない。

そして、その充実ぶりは、全国48の中核市と比べても、決して見劣りするものでなく、むしろオリンピック開催都市として、十分ブランディングの域に達している感がある。

誘致決定から開催までの限られた数年の中で、新幹線を敷設（※）し、北から南から長野市に向けて高速道路を結節させる一大事業は、まさに国家の威信をかけた力の結集による成果である。

（続く）

※北陸新幹線高崎・長野間は、群馬県高崎市から長野市に至る延長約117㎞の路線で、新幹線開通により、東京・長野間は1時間23分と、従来の2時間56分から約1時間30分の所要時間の短縮が図られた。1989（平成元）年度から建設が進められ、97（平成9）年10月1日に開業した（鉄道建設・運輸施設整備支援機構）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長